『長距離走者の孤独』について

植　木　利　彦

岡山理科大学教養部

（昭和57年9月24日　受理）

I

アラン・シリトーの作品には各々の作品が単独で何気ない人生の一断面を描き出し，独自の世界を形成しているものと，各々の作品が時間的関係や主人公の精神的成熟度において極めて著しい関連性を持ち，次第により深い主人公の人間像を追求していく作品群と，そして生まれ育った故郷を形而下的に放棄しながら，形而上的に放棄しえず，形而上的な故郷からの乳離れを願う主人公を扱った作品群に大別することができると思う。

彼の作品の中で第二群に属するものは，シリトー自身が生まれ育ったノッティンガムの貧しい社会環境の中で，彼と同じように貧しく無学ではあるが，その日その日を精一杯に生きぬく少年や労働者のたくましい姿を描いたものである。彼等の生活は過去の想い出や出来事に結びついても，未来に結びつくことのない現在だけの生活なのである。彼等は厳しい環境の中で死にもの狂いで，生きていく手段を体得し，真に生きることの意味を知り，同時に彼等を取巻く社会の矛盾や不正に目覚めて行くのである。各々の作品に描かれている苦悩と怒りに満ちた主人公達の大胆不敵とも，あるいは自暴自棄的とも思える行動と思考は，取りも直さず，シリトー自身の精神的成熟度の道標であり，彼自身の社会批判であると考えられる。

この小論では『長距離走者の孤独』を中心に，主人公スミス少年の反抗精神に焦点を合わせ，彼の社会に対する考え方を解明してみたい。

II

スミスは仲間と大枚150ポンド程の金を盗んで目下感化院暮しなのであるが，彼にとって感化院という場所は強制的に命令に服従することを教える場所であって，収容されている少年達の非行に走った心理や原因を理解することなど全く問題にしていない場所と思われるのである。つまり，感化院は犬や猫や家畜を強迫することによって飼い主の意に従わせるのと変りのない訓練所であり，そこには個々人の人間性を尊重する雰囲気などは全くないのである。むしろ強制のみによって非行を犯した少年達を更生させようとする行為は，強い独立精神を持つ少年達の側により強い反発精神を鼓舞するだけのことである。スミスはこうした人間的な理解を欠いた収容する側と収容される側の対立を次のように述べてい

る。

If only 'them' and 'us' had the same ideas we'd get on like a house on fire, but they don't see eye to eye with us and we don't see eye to eye with them, so that's how it stands and how it will always stand. The one fact is that all of us are cunning, and because of this there's no love lost between us.[1)]

このように両者の間に愛情も理解し合う姿勢もなく，存在するものが憎悪だけであれば，院長のいう「誠実」とは一方的に感化院の規則（ひいては社会の規則）に従うことをスミスに要求することであり，スミスのいう己の意志に対する「誠実」とは相入れないものなのである。スミスは両者の「誠実」さの意味の相違を彼自身が犯した盗みの中にも薄々感じとっているようである。その点を考察してみよう。

＜他人の金や物を盗むのは悪いことであるという理論は，金や物を盗まれることによってはっきりとした目に見える被害を受ける側にいる者が，彼等の都合のいいように定めた人為的な理屈であり，金や物を所有してない者の為に定められたものではない＞とスミスは感じているのである。つまり，世間でいう誠実さとか，正直さというものは金や財産のある者達の側から見て一方的に「良し」とする有法者の物の見方であって，逆の立場にいる無法者の側から見て「良し」とする見方ではない。要するに，何も持たぬ貧しい側にいる者達からすれば，生きていくためには，何も持たぬ者は持てる者から奪わなくてはならない，という絶対的真理に基づいて生きることを拒否されているのである。何も持たぬ者は持てる者から，強いものは弱いものから，奪われたものはより弱いものから奪いとって生きるのが自由な野生の動物の世界の原則なのである。スミスが強調したい誠実さとは正にこの自由な野生の動物の誠実さなのである。何故なら彼の目に映る現代社会はそうした世界なのである。ただ彼には，有法者達が道徳観や規律，法律といった頑丈な檻の中に入り，且つ警察権力という鉄砲まで持ち，檻の中から野生の動物の獲物を盗み取ることをおおっぴらにやりながら，野生の動物が檻の中に手を入れようとすると，鉄砲を持ち出し威嚇している不公平な現実――野生の動物の世界の奪うこと，奪われることが五分五分の勝負ではなく，一方的に有法者に有理にできている現実――がはっきりと理解されていないが，少しは分っているようである。スミスにいわせれば，自分の生活から体得したものでない押し付けられた道徳観や規律，法律を後生大事に守って檻の中で生いている奴などは，自分の魂を売った，はらわたの腐った「死んだ連中」なのである。彼にとっては，人間には自分の意志や欲望，本能に従って自由に無法者の世界に生きるか，規律や道徳観に縛られた有法者として「死んで生きる」かの二つに一つなのである。

At the moment it's dead blokes like him as have the whip-hand over blokes like

me, and I'm almost dead sure it'll always be like that, but even so, by Christ, I'd rather be like I am—always on the run and breaking into shops for a packet of fags and a jar of jam—than have the whip-hand over somebody else and be dead from the toenails up. Maybe as soon as you get the whip-hand over somebody you do go dead.[2)]

だからこの対立する両陣営に属する者達の間には妥協はあり得なくて，存在するのは闘いのみである。

闘いとは殺し合いであって理解や妥協ではない。たとえ一時的な妥協が成立し，理解し合ったようにみえても，不利益を被った側には常に機会さえあれば胸の内の憤怒の念を晴らそうという憎悪が煮えたぎっているのである。従って相手を完全に滅ぼさない限り，一時的に勝利を収めた側には，常にこっぴどいしっぺい返しを喰う恐れが残っているのである。スミスはこの可能性を長距離競争によって見事に院長に証明してみせたのである。つまり，現社会体制を肯定する有法者は彼等の社会体制を否定するスミスのような人間を更生施設や刑務所に収容しても，それは罰や懲役という強迫手段によって一時的に反社会的な人間の行動を押えつけているだけであって，反社会的な人間の考え方を理解すれば，殺してしまう他は手はないのである。事実，封建社会においては専制君主は彼等の施政に反抗する者を容赦なく殺害したのである。だが現在の社会では，有法者達は人間の権利，道徳観，法律等の人為的な檻によって安全を確保しているのであるが，逆にそうした作為が檻から飛び出して反社会的な人間を容赦なく撲滅する障害となり，彼等の安全を大きく脅かしているのである。一方スミスのような反社会的な人間は如何なるものにも拘束されず，既成概念を無視して相手を攻撃しえるのである。ここが，彼にいわせれば，絶対に自分の意志と本能に誠実に生きる人間が最終的に勝利を収める所以なのである。

And all this is another upper cut I'm getting in first at people like the governor, to show how ....., how in the end the governor is going to be doomed while blokes like me will take the pickings of his roasted bones and dance like maniacs around his Borstal's ruins.[3)]

ではスミスは何故それ程までに，彼の父親のように，個人の意志や本能に誠実に生きることを主張するのだろうか？　その理由は，前にも少し触れたし，次の章でスミスによって説明されるのであるが，スミスと年令的にも生活環境からも同類と見做される『屑屋の娘』の主人公トーニー少年の体験に述べられていると考えられる。

The first thing I stole was at infants school when I was five. They gave us

cardboard coins to play with, pennies, shillings, halfcrowns, stiff and almost hard to bend, that we were supposed to exchange for bricks and pieces of chalk. This lesson was called Buying and Selling. Even at the time I remember feeling that there was *something not right* about the game, yet only pouting and playing it badly because I wasn't old enough to realize what it was.[4)]

彼にはその「不当な何か」が，ある者達だけに許されて，彼に許されていないのだということを，そして許されている者が許されていない者の何かを奪っているのだということを直感的に知っているのである。つまり，この現実社会は，有法者だけが目に見えぬ略奪をする権利を与えられ，無法者の略奪からは保護されているという実に不公平な略奪社会なのである。有法者のいう道徳や法律は彼等の目に見えぬ略奪行為を正当化する方便であって，実質は巧妙な罠であり，意志と本能のおもむくままに富を漁っているのである。有法者も略奪するのなら，無法者と同じであり，この社会は奪い，奪われる可能性が半々の野生の社会でなくてはならない。野生の社会で生きるには野生的でなくてはならない。これがスミスやトーニーが個人の意志と本能に基づいて生きる最大の理由なのである。スミスもトーニーもこれを身をもって証明しているのである。スミスは尋問に来た警官と，とことん張り合う。トーニーは盗んだ金と共にあった切手を次々と通りの角に張っていく。これは逃げられる可能性と逮捕される可能性を五分五分にすることによって公平な闘いを挑みたいからに外ならない。

I gave her half the stamps and she handed me half the money—which came to twenty quid apiece. We homed our way the couple of miles back, sticking one or two stamps (upside down) on each of the corners turned. "I don't write letters," I laughed. It was a loony action, but I have to do something insane on every job, otherwise there's no chance of getting caught, and if there's no chance of getting caught, there's no chance of getting away.[5)]

これが正当な闘いであって，「不当な何か」によって絶対的有利な立場で闘うのは卑劣なことなのである。だからスミスもトーニーと同じく「不当な何か」に漫然と屈服し，現代社会を肯定して生きることができないのである。彼等が『土曜の夜と日曜の朝』の主人公アーサー・シートンや「炭坑ストライキ」の主人公ジョシュアのように年令を重ねていれば，もっと理論的に社会悪を分析し，もっと知的，合理的手段によって「不当な何か」に対処できたであろうが，その「不当な何か」の本質を理解し，追求する知性もなく，手段も知らない少年の焦燥感が現社会体制を真向うから否定しているのである。そして，彼等の目から見れば，「不当な何か」を秘めた現社会体制を擁護している警察権力は不当性の

代表的存在なのである。彼等にとっては警察を出し抜くことが不当な社会に対する精一杯の反抗であり，盗みはそうした不当性への服従拒否の意志表示なのである。

彼等は野生に近い社会に生きているから野生的に生きることを主張しているだけであって，本心は盗みや反抗を絶対的善とみている訳ではない。本当は個人の自由が尊重され，誰もが平等な社会を望んでいるのである。

What I'd like, believe it or not, is to live in a country where I didn't like thieving and where I didn't want to thieve, a place where everybody felt the same way because they all had only the same as everyone—even if it wasn't much. Jail is a place like this, though it's not the one I'd find agreeable because you aren't free there. The place that fills my mind would be the same as in jail because everybody would have the same, but being free as well they wouldn't want to nick what bit each had got. I don't know what sort of system that would be called.[6)]

この社会は社会主義社会でも，共産主産社会でも，資本主義社会でもないことは一目瞭然であるが，その理想とする社会を論理的に説明したり，現社会体制の矛盾を追求しうる能力も学識もない彼等の精神的未熟さが相手との対話，交渉を拒否し，社会に属する人達を単純に有法者と無法者に分類させ，彼等を無数の敵を向うにまわして孤軍奮闘している英雄気どりにさせているのである。

正にスミスの誠実さとは，大人の世界の不正を追求できぬ反抗的な子供のヒステリックな泣き声にも似た感じであり，社会の機構や制度を理解できぬ故に自分の意志と本能だけを頼りに最も原始的な無茶苦茶な行動という形で反抗している態度といえるだろう。

III

長距離競争は単にきれいに手入れされたトラックを観客に見守られ，声援を受けて走るのではなく，変化に富んだ道を誰にも見守られることもなく，自分の孤独と闘いながら，いつまでも走り続けるところがスミスの闘争精神そのものである。長距離競争はスミスにとって単なる趣味でもなければ，院長の鼻をあかす手段だけでもなく，前の章で述べた「不当な何か」を説明する手段でもある。その点を考察してみよう。

スミスを走らせて，優勝杯を獲得させ，それをスミスを鍛え上げ，ここまでにした自分の功績にしようと目論んでいる院長は現代社会の「奴等」，有法者であり資本家の代表者なのである。院長自身が汗水たらして毎日努力し，長い距離を走って獲得した優勝杯でもないものを自分の功績の如く自室に飾るのは，労働者を安い賃金で働かせて得た利益を公平に分配するのではなく，不当に資本家のものとして搾取しているのと同じことなのである。この行為は，スミスが町のパン屋から金を盗んだことや，ハイキングに出かけて来た

上流階級の子供達の食べ物を奪い取ったのと，ちっとも変わるところはないのである。スミス少年にしてみれば，はっきりと目に見える盗みであれ，搾取されている労働者が気付かないような盗みであれ，盗みには違いないのである。なのに，目に見える盗みをした者が罰せられ，目に見えぬ盗みをした者は，罰せられないどころか，大きな顔をしてのさばり，場合によっては，そうした行為が功績であるとか，栄誉として讃えられる不合理がまかり通っているのである。スミスにはそうした社会の仕組が不可解なのである。考えれば，院長がスミスを励まし，厚遇するのは，丁度，資本家が僅な給料 up や手当てによって，労働者を手懐け，より大きい利潤を追求するのと同じなのである。だから院長の栄誉と出世のために走らされるということは，スミス自身が競争馬の如く，飼い主に服従し，院長の行為を肯定することを意味するし，また，院長の期待するようなレースを走ることは，院長の狡さに彼が負けたことになるのである。これは明らかに有法者の側に属して生きることになる。逆にレースに負けても，院長に彼自身のレースを走って見せつけることが，彼の方が院長より「より狡く」，決して騙されないことを，自分自身の意志に対して誠実であることを，そして院長が自覚していない彼の「不当性」を暴露することに絡がるのである。スミスは院長の魂胆を見抜いて，レースについて，そして自分の誠実さについて次のように述べている。

It (i.e. the Borstal Blue Ribbon Prize Cup For Long-Distance Cross-Country Running) don't mean a bloody thing to me, only to him, and it means as much to him as it would mean to me if I picked up the racing paper and put my bet on a hoss I didn't know, had never seen, and didn't care a sod if I ever did see. That's what it means to him. And I'll lose that race, because I'm not a race horse at all ..... I'm a human being and I've got thoughts and secrets and bloody life inside me that he doesn't know is there, ... [7]

Because another thing people like the governor will never understands is that I *am* honest, that I've never been anything else but honest, and that I'll always be honest. ..... But it's true because I know what honest means according to me and he only knows what it means according to him.[8]

常に自分の意志や本能に対して誠実に生きるためには，院長のような人間に騙されないことが絶対に必要であり，そのためには，スミスは相手より「より狡くなくてはならない」というのである。

Cunning is what counts in this life, and even that you've got to use in the slyest

way you can ; ... [9]

何故なら「狡い」ということは，相手を騙し，相手を思いのままに支配したり，相手のものを奪い取ることも可能にするのである。現に，社会では「より狡い」連中が貧しい人々を働かせ，多大の利潤を上げている。これは彼等の方が，貧しい人々より「より狡く」，貧しい人々を彼等の檻の中で，ペットの如く飼いならし，働かせているからなのである。従って，そういう世界が存在し，その中で人間が生きている以上，「より油断なく」，「より狡く」生きることが自分を生かす絶体的条件となるのである。つまり，好むと好まざるにかかわらず，この世は野生の世界であり，油断することは命取りになるのである。この点をスミスはハイキングに来ていた子供達を襲った時のことを例に上げて，次のように述べている。

But they never dreamed that what happened was going to happen, just like the governor of this Borstal who spouts to us about honesty and all that wappy stuff don't know a bloody thing, while I know every minute of my life that a big boot is always likely to smash any nice picnic I might be barmy and dishonest enough to make for myself.[10]

だからスミスにとって，院長に支配されることなく，自分の意志に従って生きるためには，定められたコースを走るのではなく，地道であろうが，藪であろうが，自ら切り開いて走り続ける道を見つけ出さなくてはならないのである。

You should think about nobody and go your own way, not on a course marked out for you by people holding mugs of water and bottles of iodine in case you fall and cut yourself so that they can pick you up—even if you want to stay where you are—and get you moving again.[11]

これは正に檻での安楽な生活を嫌い，猟師に狙われようが，獲物を求めて本能と意志に従って，ジャングルの中で方向を定めて突き進む野生の動物の姿を思い起こさせるのである。

自分の意志に誠実に生きること，それはどんなに辛いことであっても，「生き生きと生きる」ことなのである。スミスが，将来においても，「生き生きと生きる」ことを証明したのが，あのゴール直前での優勝放棄である。人の見ていないコースの途中ではなく，ゴール直前の大観衆の前でのこの行為は，院長のような人間の思惑通りには動かないというスミスの意志表示であるのみならず，搾取されている貧しい者も人間であって，資本家の利潤追求の単なる手段や機械でもなく，木偶坊でもないことを，彼等，お偉方や有産階級

の連中の前で公然と見せつけたのである。それは，彼等の目のとどかぬ所でするサボタージュではなく，面と向ったストライキ行為であり，どのように踏みにじられようが，果てしなく「不当な何か」を秘めた社会に対決し続ける決意の表明なのである。

IV

『長距離走者の孤独』は盗みの行為と，その盗みが原因で感化院に収容され，長距離競争を走らされた二つの物語から成り立っているが，前に見たように「盗み」という行為は，スミス少年にぼんやりと感じられている社会の「不当な何か」が彼の目に見える盗みの行為と何ら変わるものではないことを必死に訴えている行為であり，長距離競争はその具体的な説明であった。「不当な何か」が公然と認められ，そうした制度を利用して，ある一部の有法者が大衆から目に見えぬ盗みをしている以上，そうした社会は基本的に略奪社会なのである。現社会が略奪社会であるならば，「盗み」は動物的本能に基いた基本的な生きていくための行為であって，あるものに認められ，他のものに禁止されたり，また，美化されたり，嫌悪されたりすべきものではない。そうした社会で本当に生きるためには，全ての人間は自らの力で獲物を手に入れ，盗まれないように用心しなくてはならないのである。そのためには，他人ではなく，自分の意志に誠実に生きなくてはならない。自分に誠実に生きるためには，常に自由であり，支配されるものを一切排除しなくてはならない。それが彼のいう長距離走者の孤独に象徴されているのである。

As for me, the only time I'll hit that clothes-line will be when I'm dead and a comfortable coffin's been got ready on the other side. Until then I'm a long-distance runner, crossing country all on my own no matter how bad it feels.[12)]

これは彼が現代世界に存在する如何なる社会体制にも属さないことをはっきりと明言しているのである。何故なら資本主義社会では，個人の自由は大幅に認められているが，資本家と労働者の関係において，資本家が利益を搾取しているのであり，社会主義や共産主義社会では全体主義の名において，一党独裁がなされ，個人の自由が大幅に奪われているのである。つまり，スミスにとっては，如何なる体制であれ，そこには指導者という名の支配権を握った階級が存在するのである。その体制に属する者は，その指導階級の決定に従うか，あるいは多数決に基いた全体的な意志決定に従わざるを得ないのである。こうした体制は，どのような形であれ，決定に反対の個人の何かを奪い，無理矢理個人を服従させているのである。これは，スミスには，承諾し難いことなのである。彼の求める社会とは，如何なる形の指導者も存在しなければ，個人の意志も無視されることのない社会，たまたま，ある事柄について意見を同一にする者が，対等の立場で一時的に協力し合う，平等で自由な個々人の集合体のような社会なのである。そのような社会が実現されるか，否かは

別にして，彼はそのような夢を抱いて一人黙々と孤独な道を走り続けるのである。

Notes

1) Alan Sillitoe, *The Loneliness of the Long-distance Runner* (London: W.H. Allen. 1977) pp. 7-8
2) *ibid.*, p. 14
3) *ibid.*, p. 46
4) Alan Sillitoe, *The Ragman's Daughter* (London; W.H. Allen. 1976) p. 10 イタリックは筆者
5) *ibid.*, p. 18
6) *ibid.*, pp. 11-12
7) Alan Sillitoe, *op. cit.*, p. 13
8) *ibid.*, p. 15
9) *ibid.*, p. 7
10) *ibid.*, p. 18
11) *ibid.*, p. 44
12) *ibid.*, p. 25

On *The Loneliness of the Long-distance Runner*

Toshihiko UEKI

Deparment of General Education,
Okayama University of Sience
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, JAPAN

(Received September 24, 1982)

The Loneliness of the Long-distance Runner consists of two stories, the one is on an actual theft and the other on a long-distance race.

The actual theft done by Smith is thought as an action which appeals to the public at large that his theft is the same one as a theft the capitalists do. Without being noticed they unfairly steal profit from labor by making labor work at very low wage, or they deprive of the way of living by firing labor out on their convenience. But theft is theft, whatever way they may take. Smith wants to appeal this truth.

The long-distance race is the allegorical or metaphorical explanation for such capitalists' exploitations.

In this thesis, we narrow points down to the theft and the long-distance race and want to analyze Smith's opinions on the society.